

総合的地域研究の概念

1. 研究組織

研究代表者：高谷 好一（京都大学東南アジア研究センター・教授）
研究分担者：應地 利明（京都大学東南アジア研究センター・教授）
掛谷 誠（京都大学東南アジア研究センター・教授）
松原 正毅（国立民族博物館・教授，地域研究企画交流センター長）
家島 彦一（東京外語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授）
阿部 健一（京都大学東南アジア研究センター・助手）

2. 研究のねらい・目的

この研究は、同じ研究課題のもと、平成5年度と6年度に重点領域研究の一つとして認められ実施してきた研究の実質的な継続である。したがって研究目的は、昨年度に引き続き、「世界単位」という地域概念を用いて地球世界を分析してみることにある。

今日ほど「地域」が注目されている時代はない。多様な文脈で「地域」が語られ、地域の意味する範囲・概念もさまざまである。交通・情報メディアの発達に伴い、世界の「地域」は身近なものとなった。反面、個々の「地域」では、技術文明、近代的価値観といった普遍的なるものに直面し、その対応を余儀なくされている。地域の存在性そのものが問われつつある、といってもよい。「地域の再発見」ともいえる現象は、この普遍的なるものが、すでに世界の多様な地域の隅々まで浸透し、そこで地域の固有性の存続を巡って今まさに「地域」と対峙していることの証左とも言える。

こうした状況の中で、「地域」を世界の中から括り出し、それぞれが固有の価値体系と歴史性をもった存在であり、世界がそれら「地域」の連関から成り立つことを示す地域概念として「世界単位」を提示した。

「世界単位」とは、固有な生態の作り出す風土が、文化的・政治的に結び合わされて形成された一つの地理的範囲である。生態を基盤とする「風土」、人間の物質的かつ精神的営為の歴史的集積である「文化」、それらの紐帯あるいは統合装置としての「政治」、このような異なる次元の概念を輻輳させた、全く新しい地域概念である。言い換えれば、国家という近代的な政治単位を越え、「文明論」的な歴史の束縛から抜け出して、地域を認識しようとする試みである。

むしろ「世界単位」は完成された概念ではない。その批判・検討を通して、新たな地域概念

を導き出すことがこの研究班の近接目的である。しかし、究極目的は、新たな地域概念を用いて、21世紀における新秩序を考える手だてとすることである。

3. 平成6年度の研究経過

今年度行った研究会は以下の通りである。

まず4月に、家島彦一が「イブン・バトゥータの歩いた世界」について発表を行った。メッカ巡礼を起点に、イラク、アラビア半島を経てインドのデリーに滞在、さらにスマトラ、泉州、北京にいたった旅の軌跡をたどりつつ、当時の旅行のありかた、異質な空間を移動する人々の異文化との出会い・交流の様子を紹介し、逃避、移動(hijra)、メッカ巡礼(haji)、聖地・聖廟参拝(ziyāra)、旅・商売(rihla)など移動こそが常態である西アジアの歴史的・地域特性について語った。

10月には、阿部健一が「熱帯多雨林の生み出したもの」と題して、かつて商人が森林産物を得るため到来し、次にプランテーション作物で世界経済システムに組み込まれた島嶼部東南アジアの熱帯多雨林をとりあげ、このいわば「巨大な受け身空間」が、環境の世紀といわれる来世紀に何を発信できるか、について語った。

12月には、松原正毅が、「草原からの風景」と題して、ユーラシア大陸の遊牧に注目し、「地域」を論じた。「遊牧の起源」からはじまり、遊牧の核心域と周辺、「遊牧社会」へと論点を展開し、最後は「遊牧と地域間研究」について議論を行った。生活の根底に「動くこと」が抜き差しなく埋め込まれた地域と、「定住」こそが人の生活であるとする地域との、決して融合することのない価値観の相克が語られた。

以上は、「世界単位」を意識しつつ、メンバーがそれぞれの対象地域についてその地域特性をそれぞれの専門領域に引き寄せて語る研究会である。こうしたメンバーによる個々の研究会に加え、今年度から新たに、地域間比較を研究の手法に加え、より広範に東南アジア「外」地域研究者の参加・協力を仰いだ研究会をオーガナイズすることになった。そこでは、「世界単位」を一つの拠り所としつつ、他地域の研究者と地域概念について論究することになる。地域概念の確立が目的であるが、他地域との比較から、東南アジアが逆照射され多層的な東南アジアの地域性が鮮明になることも期待している。

この地域間研究の手始めとして、「地域間研究の構図(1)南アジアと東南アジア」と題した研究会を、5月と7月の2回にわたり、原班・坪内班と共同で開催した。

1回目の研究会では、東南アジア地域研究者の側から「東南アジアでの地域研究の成果から

南アジアをみると、どのような構造をもった世界として理解できるか」という問題提示があり、それに南アジア研究者が応対する形ですすめられた。

まず立本成文から「海域世界」として東南アジアを再構成する試みとその基底力学として「つなぐ論理」の概念提示があり、カウンター・ベクトルとして「わける論理」「くくる論理」が示され、南アジアは「くくる論理」の卓越した地域ではないか、との提起がなされた。ついで、高谷からは世界をゆるやかな「地域単位」に区切る試みとして「世界単位」論を展開、ヒンドゥ世界を一つの単位として捉えた歴史的・生態的背景を説明した。

辛島昇氏の冒頭発言から始まった討論では、南アジア研究者から、地域の構造を重視しつつもその関係性に注目する見解に対する共感が示された一方、地域の画定・区分の不明瞭性（とくに時間軸の設定に関して）について疑問が出された。参加者の専門領域の広さもあり論点は集約するよりも拡散し、また両地域の研究者の用語・関心に微妙なズレもあったが、そのこと自体が東南アジアと南アジアの地域性を比較し際立たせる地域間研究の作業であった。

第2回の研究会では、南アジアと東南アジアの歴史的つながりに関心が絞られた。まず山崎元一が、南アジア古代史研究の成果から、北インドからガンジス河流域へと展開した異民族・周辺諸民族の「アーリア化」の歴史的過程について話題を提供した。ついで、石井米雄が、東南アジア史の視点から、東南アジアの「インド化」について論じ、形骸化されたバラモンの役割に象徴されるように、国家形成の原理・思想体系といった組織化された文化としての「インド」は東南アジアに定着しなかったことを示した。討論では、カーストを受容しなかった東南アジアの特性が主として論じられ、森と海に分断された小人口地を抱える生態的特性、強固な政治装置よりも個人の超人的パワーが重視される王権、「インド」の影響を総体的・連続的でなくむしろ地方的・断続的に受けた点が注目された。

この都合2回の研究会の成果は、成果報告書シリーズNo.4『東南アジアと南アジア—地域間研究の視点から—』としてすでに出版された。

東南アジアを軸にした地域間研究は、次に中東を対象地域とした。研究会は片倉班の全面的協力を得て、3月に開催した。やや詳しくこの研究会「地域間研究の構図（2）中東と東南アジア」の概要を記しておく。

まず古川久雄が、「風土と変貌」と題して、中東と東南アジアとの生態基盤の比較対照を行った。中東の発生学的な原風土は、砂漠の中のオアシスであり、有限のしかし快適なエクメネーが散在しているのが特徴である。そこでは稠密な人間空間＝都市が早くから形成され、生活の規範として人工的制度・人間相互の契約などが世界に先立ち成熟した。これを古川は「社会

的練度」の高さと表現する。またこの外延的展開を許さない人口扶養力の小さい固定された風土は、一気に砂漠を越え海を渡る人の移動を生み出す根元となった。一方、東南アジアの原風景は、熱帯多雨林である。潜在的エクメネーは限りないが、その”開拓”には時間がかかる。地印的に人の活動は残るものの、景観は近代にいたるまで大きな変貌を遂げることはなかった。風土のドラスティックな変貌は、近年の爆発的現象であり、その間東南アジアは、発信源たる中東とは対照的に、ひたすらモノ・人・情報の受容体として存在していた、と理解する。

次に家島彦一が「都市とネットワーク」をテーマに話題提供を行った。家島によると、中東では初めに都市ありき、であった。その都市は、周辺部からの”自然”な人口の集中によるものでなく、むしろ道（ネットワーク）の結び目（ノード）に形成された人工的なものであった。したがってこの「原都市」は、本来的に「無の点」であり、「人・水・安全」が保証されなくなればすぐに霧散してしまう「はかない場」である。そして、中東は、基本的にこうした Intercity Network が織りあげた緩やかな拡がりであるとする。東南アジアで器（地域）が先行するのに対し、中東はこうした中身（人）の関係性から成り立っていることが大きな違いである。家島はハドラム・ネットワークを事例に、従来の「器」論から脱却した、港市と海域世界という、地域社会・国家を超えた世界像を提示した。家島の話題提供に対しては、高橋美喜が東南アジアの華僑・華人ネットワークの分析成果から、また応地利明が「ネットワーク論」を整理する立場から、それぞれコメントを行った。

第3セッションは、大塚和夫が話題提供を行った。テーマは「イスラームと地域」である。大塚は、中東＝イスラーム（あるいは中東＝アラブ）、と当然のように語られてしまうことを問題にしている。むしろそのようなイメージを喚起させる「根拠」も多い。が、中東という「地域」を語るときに、あえて不即不離の関係にある「イスラーム」をはぎ取って、地域そのものを透視する作業も必要であるとする。中東も「東南アジアと同じように」イスラーム化された地域である、という視点である。そうすることによりイスラームが「外部的」に存在しているとする東南アジアとの地域間研究に分析の枠組みを提供できるのではないか。具体的にエジプトとスーダンの「民衆イスラーム」の事例を紹介しつつ、中東のイスラーム化、イスラームの地域化について論じた。大塚の話題提供に応じて、加藤剛が、東南アジアのイスラーム化について、地域におけるイスラームの様々な様態を示しコメントを行った。

最後のセッションは総合討論とし、片倉もとこ・高谷好一両研究代表者が冒頭発言を行い、討論の口火をきった。討論の展開は、報告・コメントとともに、成果報告書シリーズにまとめる予定である。これは『南アジアと東南アジア』に続く、地域間研究の成果となる。

4. 研究の成果とフロンティア

今年度の成果としては次の二つがあったということができる。

第一は地域研究とは何かに対するコンセンサスができて来たことであり、第二は地域研究遂行のひとつの手法として「地域間研究」がいささか前進したことである。

I. 地域研究とは何か？

地域研究は学際的研究であるべきだ、といったことは常識となったが、「何のために」地域研究をするのか、という問いに対するコンセンサスはまだできていなかったように思う。しかし、今年度に入って、それに対する答がかなり明確になってきたように思われる。

結論から先にいうと、地域研究はポスト・モダンの世界秩序を探る学問である、という考え方である。

近代思想で突き進んできた道が、行き止まりになっているのではないかという声が高まってきた。今までは近代合理主義を唯一の普遍論理として、世界の全ての地域は進んで来ざるをえないような状況にあった。だが、最近ではそれに反省が加えられようとしている。いわゆるポスト・モダンが議論される背景がここにある。

地域研究は“世界は、もともと異質な価値観を持った多数の「地域」からなるものである”という認識から出発している。普遍論理というようなものは本来存在しえず、実際にはいろいろの論理が併存しているのが世界なのだから、その多様な論理の併存の状況を的確に把握しよう、そしてできれば、将来にわたって、それらが共存していく道を探り出してみよう、それが地域研究の目的である、という認識が広がりつつある。

これは私達の班が得つつある成果の一つである。

II. 「地域間研究」の開拓

第二の成果はいわゆる「地域間研究」が軌道に乗りつつあることである。「地域間研究」というのは地域研究を進めるに際してのいわば新しい手法である。

地域の性格を明らかにするためには、今までのところ、二つの方法があった。一つは研究対象に選んだ地域を克明に研究する方法である。該当地域については極めて詳しく調べ、深い研究を行うが、それ以外の地域のことについては殆んど注意を払わない。一点集中主義である。今ひとつは世界全体を視野において、世界の構造をまず調べ、その上で、該当地域をその構造の中に位置付けようとする方法である。これらの二つの方法はいってみれば「地域派」の方法、「世界システム派」の方法とでも呼ぶことが出来る。

しかし、私達はいわば第三の方法で研究を進めようとしている。世界は多文明の併存である、

という視点にたつて、異なった地域単位と思われる二つの地域を比較することによって、該当地域の性格を明らかにしようとするものである。本領域研究の場合だと、東南アジアの性格を明らかにすることであるから、東南アジアを常にもうひとつの地域と比較対照することによって、東南アジアそのものの性格を明確にしようとするものである。すでに私たちはこの視点に立って「南アジアと東南アジア」「中東と東南アジア」という比較研究を行ってみた。私たちが「地域間研究」としているのはこの種の研究である。

「地域間研究」はそれなりの特徴をもっている。この方法だと該当地域を他の地域と比較するのであるから、該当地域の性格は他とは峻別された形でよりディスクリートに描き出せる。これは一点集中主義の時々陥るかもしれない非能率的精査を避けうる利点がある。さらに他地域と比較しているのであるから、単に該当地域の個別性の把握だけでなく、該当地域を他との関連の中でとらえうる利点もある。この方法はまた、「世界システム派」の方法とも違う。この方法では該当地域は独自の価値体系を持った、ひとつの独立した地域であるという前提に立って論を進めていく。地球は一つの「世界システム」に覆われている、該当地域はそのセグメントに過ぎないという考え方とは、おのずと違った分析になっていく。それは抽象的な言い方かもしれないが地域の尊厳をまず何よりも最初に認めた分析法である。

ポスト・モダンの世界は一つの文明で覆われた世界になると考えるのか、それとも多文明の共存の世界になると考えるのか、そのあたりの所が、研究を進めるにあたってその手法を分ける基本的な路線になるのだが、当研究班では、後者の考えによって研究を進めようという姿勢がますます強まってきている。成果というにしては、あまりに基本的なところかもしれないが、このあたりの所を議論しながら、そして、それを研究のフロンティアとしながら研究会を続けている。

5. 今後の課題

「総合的地域研究の概念」班では異質な地域をどう比較するのか、地球世界の成り立ちをどう把握するのか、といったことを研究範囲として、公募研究班の中に、中東班やアフリカ班を擁して、研究を進めてきた。であるが、研究遂行上の課題はまるで、絡み合った糸のようで、容易にときほぐれそうにない。

各班はそれぞれに「地域研究」を続けてきて、それなりに成果を上げてきた。しかし、それらを連ねて「総合的地域研究」へ持ち上げるのに相当の苦勞をしている。具体的に言うと、東南アジアと中東とアフリカの間には、相当に大きな差があり、班ごとの研究手法にも差があっ

て、そのために、それらを結び合わせて、全体像を出すことが極めて難しいのである。

そうした中で、前年度には一応の作業仮説を出して、研究のワンステップとした。世界には三つのタイプの違った地域があるのだから、それぞれの類型内では別種の研究方法があって、よいではないか、というのが結論であった。三つの類型というのは具体的に言うと「森優勢地域」、「農耕地優勢地域」、「砂漠・草原・海＝複合」といったものである。「森優勢地域」とは東南アジアやアフリカなどで、ここでは生態を基礎において分析を進めると、比較的地域が捉えやすい。「農耕地優勢地」とは中国やインドなどだが、ここでは統治論理といったものが、分析の主軸になりうる。「砂漠・草原・海＝複合」とした所では、交易網等のネットワークを中心に据えたと分析が容易である。だから、それぞれ、進め易い方法で研究を進めてみよう、ということであった。

しかし、一方では「地域間研究」こそが「総合的地域研究」への接近の一方法ではなかろうか、ということで、異地域との比較を始めてみた。すでに「南アジアと東南アジア」、「中東と東南アジア」という二つの地域との比較を試みて見たのだが、地域により視点の据え方が異なるので、地域間研究に否応なく付随する問題が顕在化してきたのである。東南アジアから発想する時には、しばしば生態偏重になっているし、南アジアや中東側からはイデオロギーや交易ネットワークといったことに偏りがちである。両者はしばしば、行き違いになっているのである。

この視点の違いは研究者のディシプリンの違いから来る部分もある。しかし、同時に、地域の違いそのものを反映しているのである。だから、無理矢理、その視点を変えることも必ずしも正しいことではない。地域の個性を本当に主張しながら、しかし、同時にその地域とは全く異なる個性をもつ地域を比較していく。ここの所に既存の学問では解きえないような難しい問題がある。今後に残された極めて大きな問題である。

6. 研究業績（平成6年度発表分）

高谷好一

「世界の中の『世界単位』」矢野暢編『講座現代の地域研究第2巻 世界単位論』弘文堂, pp. 25-50, 1994.

「中華世界」矢野暢編『講座現代の地域研究第2巻 世界単位論』弘文堂, pp. 165-186, 1994.

應地利明

「インド」矢野暢編『講座現代の地域研究第2巻 世界単位論』弘文堂, pp. 114-132, 1994.

「地誌研究と地域研究」西川治編『総観地理学講座1 地理学概論』朝倉書店, 西川治編, (予定).

家島彦一

「国家・港市・海域世界－イエメン・ラスール朝スルタン・ムザッファルによるズファール遠征の事例から」『アジア・アフリカ言語文化研究』東京外語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, NOs. 46/47, 383-407, 1994.

「島の魅力－地域連関の接点を探る－」『総合的地域研究』NO. 6, pp. 14-16, 1994.

「イブン・バットゥータの世界」堀川徹編『世界に広がるイスラーム』栄光教育文化研究所, pp. 193-320, 1995.

「アラビアを結ぶ三角帆の木造船ダウ」小西正捷・宮本久義『インド・道の文化誌』春秋社, pp. 205-212, 1995, 2.

掛谷 誠

「アフリカ」矢野暢編『講座現代の地域研究第2巻 世界単位論』弘文堂, pp. 261-279, 1994

『講座地球に生きる2 環境の社会化』（編著）雄山閣出版, 1994.

「焼畑農耕と平準化」大塚柳太郎編『講座地球に生きる3 資源への文化適応』雄山閣出版, pp. 121-145, 1994.

「変貌する民族社会と地域研究新世界秩序を求めて」『総合的地域研究』NO. 6, pp. 8-10, 1994.

「アフリカにおける地域性の形成をめぐる」『地域性の形成をめぐる』重点領域研究「総合的地域研究」成果報告書シリーズ：NO. 2, pp. 8-12, 1994.